

---

# 好きなんでしょ？～あいつの気持ち～

白雪なずな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

好きなんでしょ？あいつの気持ち

### 【Nコード】

N7994C

### 【作者名】

白雪なずな

### 【あらすじ】

大人しく目立たない三嶋と、派手顔でうるさい性格のあたし。正反対の二人がやっとのことで結ばれてから、早二ヶ月。めでたく恋人同士になったわけだけど……。前作「好きなんでしょ？」の続編です。

## 第一話

きっかけは、三嶋の一言。だからこれは、三嶋の蒔いた種。だって、学校じゃ恥ずかしいって言うんだからしょうがないじゃない。

もし追い払われても、三嶋の何倍もあたしの方が好きでも、絶対引かない。

あたしの気持ちは、そんなに簡単なものじゃないんだから。

「加奈子お。やっぱり帰ろうよ。これじゃまるでストーカーだよ」

隣にいる美恵は、落ち着かない様子であたしの洋服の裾を引っ張っている。

おとなしく目立たない三嶋と、派手でうるさい性格のあたし。正反対の二人がやっとのことで結ばれてから、早二ヶ月。めでたく恋人同士になつたわけだけど……。

今あたし達がいるのは、三嶋の家の前。

何でこんなことになっているのかというと、やっぱり”あの噂”。

あれが、この事態の発端であり、原因であると言えるだろう。

それというのも、つい一週間前のこと……。

「えっ？ 何それ……。本当の話なの？」

「うん、ほんとほんと。後輩の知り合いが言ってたからさあ、ウソつくような子じゃないし」

愕然として聞き返したあたしに、クラスメートは面白そうな顔を  
してそう答えた。

情報通のその子から聞かされた新しい噂話は、あたしにショック  
を与えるには十分すぎるものだった。にわかには信じられないそ  
の話を、噂を聞こうと集まってきた女子達が無意味にざわめいてい  
る。

普通なら目立たないあいつの噂なんて誰も興味を持たないところ  
なんだろうけど……。あたしの人目をかえりみないアタックのおか  
げで、あいつの知名度もずいぶん上がったみたい。

心配そうな好奇の視線を投げかけられるのが嫌で、あたしは噂の  
輪から外れた。

「どっしりよっ……」

席に戻り、つぶやきながら机に突っ伏すようにして盛大にため息  
をついたあたしに、美恵が後ろから呆れたように話しかけてきた。

「何気にしてんの？ あんたは一応”彼女”でしょ？」

「だって！ これが気にしないでいられるわけないじゃん」

衝撃の事実には、あたしの気分はどん底まで落ち込んでいた。

それというのも噂の内容が、三嶋が同じ部活の後輩に告白された、  
って話だったからだ。しかも話によると、大人しいけどなかなか可  
愛いらしい。大人しいってだけでも三嶋は好きそうなのに、可愛い  
なんて……。派手顔でうるさいあたしじゃ、とても対抗できない。

ふさぎこむあたしを見ながら、今度は美恵がため息をついた。

「ありえないよねえ。誰かさんのときも驚いたけどさ、みんなどれだけ趣味悪いのよ。前よりマシになったのは確かだけどさ、弱々しい女顔は相変わらずだし」

「そうなのよ。三嶋って、よく見ると結構可愛いから……！」

「いや、悪いけどそれはあんたの勘違いだから」

美恵がなんか言ってるけど、無視。それより、どうしたらいいんだろう。今まで、三嶋を好きなのはあたしだけだったのに……。

その日の放課後、噂話に落ち込んでいたあたしは、肩を落としてとぼとぼと靴箱に向かっていた。落ち込んでると、気力がまるで湧いてこない。廊下まで窓から光が差し込んで、天気いいな、とかなんかそんなことを思ってふと、窓の外を見たその時。

「三嶋……！」

ぼんやりしてたあたしの意識は、窓の外の中庭にいる人物に一瞬で集中した。それもそのはず、中庭にいたのは、三嶋一人だけじゃなかったからだ。三嶋と笑いながら、仲のよさそうに話しているのは……。

「あの子……」

間違いない。噂に聞いたあの子だ。確かに大人しそうな雰囲気だけど、優しそうで、三嶋の好きそうな感じがする。小柄で女の子ら

しいから、男にしては身長の高い三嶋としても違和感が無い。

横に立ったら三嶋の身長、追い越してしまうあたしと違って。横に立ってもどうしても、恋人になんて見られないあたしと違って。

” お似合い”。二人を見ながらそんな言葉を連想してしまった自分が悔しかった。

それに何よりショックだったのが、あの子と話している三嶋の笑顔。あたしといっても、三嶋はあんな顔見せてくれたことなかった。付き合ってるのはあたしのはずなのに。あんなに仲良さそうに、楽しそうに話すなんて。

三嶋はあたしと話するとき、いつも敬語で。恥ずかしいって、人目ばかり気にして。

この二ヶ月間、休みの日だってデートに誘ってくれたことなんて無い。

いつもいつも、好きの気持ちはあたしばっかり大きくて……。

あの子という三嶋は、あたしの知らない三嶋に見えて。なんだか見ていられなくて、あたしはそれ以上二人を見ないようにその場を走り去った。

## 第二話

次の日になっても、あたしの心から不安は消えなかった。

最近では三嶋が恥ずかしがるから行ってなかったけど、どうしても会いたくて、会って不安を消して欲しくて。昼休み、あたしは三嶋の教室まで会いに行った。

「あ、三嶋！」

今日一日ずっと笑えてなかったけど、あたしのいる廊下まで出てきた三嶋を見たら、少しだけ心が緩んで、三嶋に笑いかけた。でも三嶋は笑い返してくれなくて。

「木原さん。すみません、帰って下さい」

やっぱり、開口一番にその言葉。きつとあたしの顔から笑顔は消えてしまっただろう。

「……………どうして？」

「教室はちょっと……………、恥ずかしいというか」

三嶋は困ったようにそう言った。

きつとこう言われるだろうってわかってた。でもそんな三嶋の態度に、あたしの不安は募るばかり。あたしはわかってほしくて、訴えかけるように三嶋の目を見た。三嶋が怯んだのが、表情でわかる。

「どっしりしてよ……………」

「えっ？」

呟くように同じ言葉を畳み掛けるあたしを、三嶋はただ困惑した顔をして見てる。

あたしの不安になんて、やっぱり気づいてくれない三嶋。あたしは俯いて、手をぎゅっと握り締めた。

どうしていつもそんなに恥ずかしがるの？ どうして会いに来ちゃいけないの？

あたし達、付き合ってるんじゃないの？ それとも、噂が大きくなってあの子に知られるのが、嫌なの……？

心の中でいろんな言葉達がぐるぐる回ってる。

ありえないって、恥ずかしがるのは三嶋が照れ屋なだけだって、わかってたはずだった。でも昨日の三嶋と彼女の笑顔が頭にちらついて、不安は打ち消すことができない。

「木原さん……？ どうしたんですか？」

三嶋の不思議そうな声。全部言って確かめなきゃ、このままじゃあたしが苦しいだけ。あたしは勇気を振り絞った。

「噂、聞いちゃったから。後輩に告白されたんでしょ？」

「あ、いえ。それは違うんです。その噂は、ただの噂です」

「そっか。じゃあ、告白なんてされなかったって言うのね？」

「はい」

三嶋のこの言葉を信じたい。でもまだ、三嶋と彼女の笑顔が頭から離れてくれない。

「でも昨日、あたし見ちゃったんだ。後輩の子と、仲よさそうに話してるよ」



「あ……」

「何話してたの？」

「それは……、その……」

三嶋は焦ったように口ごもった。しばらく待ってみても、その続きが聞けることはなくて。

ずっと不安だった。付き合えるようになったのも、あたしが好きで好きで、やっと捕まえたから。本当は三嶋は、あたしのことそんなに想ってくれてないんじゃないかって……。

ただ部活のこと話してただけ。きっぱりそう言ってくれたら、あたしはやっと信じられるのに。

「話してくれないの？ それとも……話せないの？」

そう問いかけても、黙っている三嶋。あたしの不安は増幅するばかり。

「ねえ、あたし達付き合ってるんだよね？ 付き合ってるなら、何でも話せるでしょ？」

「すみません。……話せないんです」

そう言って、三嶋はただ気まずそうに俯いてしまった。

あたしの心に、不満感とか不信感とか、そういう嫌な感情が次々に生まれてくる。

三嶋なんて、あたしのこと全然わかってない。あたしは不安になるばかりで。

三嶋と付き合えるようになった時、あたし夢を見てるかと思うくらい嬉しかった。でもきつと、時間があたしを欲張りにしたんだ。

そばにいるだけ、それだけじゃ足りない。三嶋にも、あたしとおなじくらい、あたしのこと想ってほしいって……。

三嶋を好きな気持ちは少しだって変わってない。でも、好きだからこそ、辛いことだってある。

いくら強気でも、あたしは実はそんなに強くなかったのかもしれない。

頭ではだめだってわかってた。でも体が言うことを聞いてくれない。慌てて呼び止めようとする三嶋を振り切って、あたしは、三嶋から逃げ出した。

### 第三話

放課後の教室、人気の無くなった校舎を照らしていた夕日も沈もうとしていく。

あたしは時計を見上げて、もう何度目かもわからないため息をついた。

教室で待つてたら、もしかしたら三嶋が弁解に来てくれるかもしれないって……。

バカみたい。やっぱり三嶋が来てくれるわけ無かった。もし来てくれたら、慌てて言い訳してくれたら、それだけでもう、全部許そうと思つてたのに……。

もう待つたつて無駄なんだろう。あたしは勢いよく机に突っ伏した。

でもあと少しだけ待つたら来てくれるかも、なんて、期待を捨てきれないでいるあたしはやっぱりバカだ。

帰ろうか、あと少し待つとうかって、机に突っ伏したまま頭の中ぐるぐる考えていたその時。

「ちょっと、加奈子？　なんでこんな時間に教室で寝てんのよ？」

机に突っ伏してたから、寝てるように見えただろうか。肩を揺すられて顔を上げたら、そこには慣れ親しんだ二人が立っていた。

「美恵……。それに、小池君」

「久しぶり、木原さん」

そう言って、小池君は相変わらずの優しい笑顔で笑いかけてくれた。本当に久しぶりだった。あの時以来会ってなかったから。

「うん、久しぶり。元気そうで良かった」

「まあ、何とかね。部活に打ち込んでたし」

小池君はそう言って困ったように笑った。それでも、あたしを責めるようなことはしない。

小池君を利用するような形で傷つけてしまったこと。そんなこととは微塵も感じさせない優しい人。優しさを利用したって罪恶感もあって、何も言えなかったけど、あたしは感謝を込めて小池君に笑顔を向けた。

「そうそう、小池はほんと頑張ってるよ、最近」

美恵がそう言って、小池君の背中をぽんとたたいた。小池君もそれに笑顔で答えている。

こういつやり取りを見てると、美恵と小池君ってほんと仲いいと思う。部活も同じバスケットだし、よく一緒にいるし。

「そういえば、今日は部活は？」

二人がジャージを着ているのに気づいて、あたしは美恵にそう聞いた。

「さつき終わってね。今は教室に道具取りに来たの。それより加奈子、今までここで待ってたんでしょ。三嶋とは……」

美恵はそう言って真剣な顔を見ると、心配そうにあたしの顔を見

た。

「ううん、会ってない」

「そっか……」

美恵は少しほっとしたような、でもがっかりしたような、複雑な表情をしてそれだけ言った。

美恵には三嶋とのことは全部話してある。あたしの気持ち揺れているこの状態でまた三嶋に会ったら、あたしと三嶋の関係に良くも悪くも何か変化が起きるだろうことを、美恵はわかっているんだ。自分のことのように心配してくれてる美恵の暖かい気持ちがすこく伝わってきて。我慢してた、いろんな感情が溢れそうになった。

「美恵、あたし、三嶋がわかんない。三嶋の気持ち全然見えないの」

「加奈子……」

「でも、好きなんだもん。やっとのことで捕まえたのに。絶対離したくないのに……」

涙が出そうになって、あたしは必死に瞬きを繰り返しながら堪えた。

そんな俯き加減のあたしの顔を、美恵が突然両手で挟んで、美恵の顔の方向に向けた。その拍子に涙がこぼれ落ちて、あたしはびっくりして美恵を見た。少し怒ったような真剣な顔をした美恵と目が合う。

「加奈子。見えないなら、自分から確かめなきゃだめだよ」

「え……？」

「離したくないなら尚更、逃げてちゃ話にならないでしょ。怖がつて、目逸らしてどうすんの！ あんたらしくもない」  
「……！」

あたしは思わず息を呑んだ。美恵のそのたった一言で、気持ちにかかったもやが一気に晴れた気がした。

美恵の言うとおりだ。あたしが逃げてちゃ何もならない。三嶋のことが好きで一緒にいたいなら、あたしの方から歩み寄る努力をしなければいけなかったんだ。

「目が覚めた？」

美恵がやれやれって感じの顔で微笑んでる。本当、いい友達を持つててよかった。

「……そうだね、美恵。あたしは三嶋が好きなんだから、自分の気持ち信じて、もう一回頑張るしかないんだよね」

「そうそう、俺は木原さんのそんなまっすぐな感じが好きだったんだからさ」

それまで黙って見守ってた小池君が、笑顔でそう言ってあたしの背中を押してくれる。なんだか、やっとあたしも上手く笑えそう。

「そうだよね。泣き寝入りなんてあたしらしくない。絶対、三嶋のこと離したりしないんだから」

「ちょっと、そこまで言っちゃう？ さっきまでのしおらしさはどこ行ったのやら」

あきれたような美恵の言葉。でもそんな言葉とは裏腹に、美恵は嬉しそうにふふっと笑った。

「まあ、加奈子らしいっちゃ、らしいけどね」

「ありがと。でね、美恵。早速明日ちょっと付き合っただけだけど……。もちろん、付き合ってくれるよね？」

「…………え？」

あたしの表情から言いたいことを察したのか、美恵の表情は徐々にひきつった苦笑いになった。美恵のそんな表情に、あたしは満面の笑みで答えた。

## 第四話

そして、話は今日に至る。三嶋の家の前にいるあたしと美恵。思いつめたあたしは、なんとしても三嶋の口から事実を聞こうと三嶋の家まで来たってわけ。

電話やメールなんかじゃ駄目。直接確かめてやるんだから。

「加奈子、悪いこと言わないからもう帰ろう？ そうしたほうがいいよ。ね？」

美恵がまだ青い顔してあたしの服の裾を引っ張ってる。

まあね、三嶋の家だって、パソコン部の佐々木君に勝手に聞いたんだし、あたしもそう思わないこともないけど……。

「美恵が言ったんだよ？ 自分から確かめろって」

「言ったけどさあ、何もここまで……。学校でもいいじゃん」

「だめ。三嶋が恥ずかしいって言うし、月曜日まで待てないから。ここまで来ちゃったんだし、もう後には引けないのよ」

そう、あいつにもっとあたしを好きになってもらうためだもん。もうなりふり構ってらんない、何だってするよ。

思い切ってチャイムを鳴らすと、美恵のため息と同時に、はいつて間の抜けた声が出た。三嶋の声だ。家の中からの足音がだんだん大きくなって、ドアが開くと同時に、見慣れたあいつが顔を出した。

「えっ！ 木原さん!？」



三嶋は、あたしの顔を見るなり目を見開いた。突然来たから、やっぱり驚いたんだろう。

うん、でも美恵じゃなくてあたしの名前呼んだ。そんなことが、何だかすごく嬉しい。

「遊びに来た」

そう言っただけで照れ笑いを浮かべるあたしに対して、三嶋は明らかに困惑した顔になった。……シヨック。そんな顔することないじゃん。

「……突然どうしたんですか？」

三嶋がそう言った時、家の奥の方から、こっちに近づいてくる足音と一緒に声がした。

「英次、お客さん？」

「いや、母さん……部屋にいていいから」

三嶋が止めようとするのも気にせず、ドアから顔を出したのは女優みたいに綺麗な女の人。

ひとつ、新たな発見。三嶋って家じゃ英次って呼ばれてるんだ。

知ってはいたけどそんなに聞き慣れない、三嶋の下の名前。あたしの中じゃ三嶋は三嶋だけど、いつか、名前を呼べる日があたしにも来るのかな。

「あら、英次に女の子のお客さんなんて。しかも二人も！」

女の方はそう言って、驚きつつも感激したように両手を頬に当てている。

三嶋が母さんって呼んだからお母さんなんだろうけど……。はっきりに言っただけじゃない。遣伝子ってどうなってるんだろう。

それにしても、三嶋もさすがにお母さんに対しては敬語じゃないんだ。当たり前だけど。いつも敬語で話してるのしか見たこと無いから、なんかすごく違和感がある。

彼女のはずなのにあたしには敬語でしか話してくれないのはやっぱり、距離を感じてるから……。？　なんて、そんなことを考えてるとまた気分が落ち込んできた。

「母さん、ちょっと外に出て話してくるから」

三嶋は早口でそう言った。何だか三嶋、焦ってるみたいに見える。やっぱり親に見られるのは恥ずかしいのかもしれない。三嶋は靴を履こうとしたけど、三嶋のお母さんがそれを許さなかった。

「何言ってるの、上がってもらいなさいよ。寒い中せっかく来てくれたんだから」

「えっ！」

三嶋のお母さんがそう言ってくれたのに三嶋ときたら、動揺してまた声を上げた。

あたしは少しムツとした。そんなに嫌がることないのに。

「ごめんなさいね、この子、女の子の友達なんて家に来たことないものだから、照れちゃってるのよ」

「か、母さん！」

「英次の言うことなんて気にしないでいいからね。さあ、どうぞ。温かい紅茶を出すわね」

なんて言うか、三嶋のお母さんってすごい。

三嶋は嫌がってるみたいだけど、あたし達は三嶋の家へ上がることにした。

## 第五話

案内された三嶋の部屋は、なんかアニメとかの張り紙とかそんなので埋め尽くされてるのかと思ってたけど。

意外にそんなのは何もなくて、さっぱりしていた。

三嶋のお母さんに促され、あたしと美恵がそれぞれ一人掛けのソファに座って、そのまま三嶋のお母さんが出て行ったはいいけど、三人になった途端、誰も何も言わないから気まずい空気が流れていた。

ソファは二つしかないから三嶋は居場所に困ったのか、立ったまま困っている様子だ。

あたしも意気込んで三嶋の気持ちを確かめると、ここまで来ちゃったわけだけど。いざ三嶋を目の前になると、どうやって切り出したらいいのかわかんなかった。美恵もいるし、言い出しにくい。

本当は一人で来たほうが一番良かったんだろけど、一人で三嶋の家まで乗り込んでこれるほどの勇氣はあたしにはなかった。

「あの……、それで、二人で何かの用事だったんですか？」

しばらくの沈黙の後。黙っている私達を見かねたのか、気まずい雰囲気能耐えられなかったのか。

三嶋は恐る恐るという感じに口を開いた。

「用事……？ あっ！ あたし用事思い出しちゃった！」

美恵はわざとらしすぎる言い訳を使ったかと思うと、荷物を持って立ち上がった。

「え、ちよつと、美恵！」

「ごめん、帰るね。ごゆつくり」

止める間もなく、美恵は満面の笑顔でそのまま部屋を出て行ってしまった。

階段を降りていった美恵が、おじやましました〜って言ってるのが階下から聞こえてくる。

まあ、気を遣ってくれたのは嬉しいけど、もう少し自然に出て行ってほしかった。二人になってさらにしんとしてしまった部屋の空気が重い。

「三嶋、とにかく立ったままじゃ話せないから、座りなよ」

「は、はい」

とりあえず、あたしは三嶋にさっきまで美恵が座っていた、あたしの前のソファに座るよう促した。三嶋はどこか緊張した面持ちで従った。三嶋の部屋なのに、これじゃまるで立場が逆みたい。

「今日は、三嶋とゆつくり話そうと思って来たの。ここなら話せるでしょ？ 恥ずかしいってことないんだから」

ずっと黙っててもどうにもならないから、思い切ってあたしは切り出した。

「三嶋と二ヶ月付き合って、幸せでもあったけど、辛いこともあって……。でもずっと我慢してたから。聞いてくれる？」

三嶋は緊張した様子は相変わらずだったけど、頷いてくれた。三嶋のこと傷つけるかもしれないし、嫌われるかもしれないから本当

は言いたくない。でも言いたいことも言えないで我慢してるなんて、そんな表面だけの付き合いは、あたしはしたくない。

好きだからこそ、三嶋にもあたしのことわかってほしい。あたしの気持ち、あたしの二ヶ月分の思い。知って欲しかったから、あたしは三嶋の目を正面から見据えた。

「あたし、この二ヶ月ずっと……寂しかったんだよ、三嶋」

「え……？」

「付き合っただけでも不安を感じてた。あたしと三嶋の間の距離は付き合う前から全然埋まってないんじゃないかって。好きなのは……、あたしだけじゃないかって」

初めて打ち明けたあたしの気持ちに驚いたのか、三嶋は意外なもので見るような目であたしを見ている。そんな三嶋を見ながら、あたしは続ける。

「やっと気持ち通じて、最初は嬉しかった。でも三嶋は学校であたしが会いに来てでも恥ずかしくなっちゃってばかりで、あたしと話す時はずっと敬語だし……」

三嶋を責めるようなこと言ってるのに、三嶋は意外にも目を逸らさないうで聞いていた。もしかしたら、三嶋もちゃんと向き合おうとしてくれてるのかもしれない。

だったら、あたしも真剣に、素直に伝えなきゃいけない。怖くても逃げちゃだめなんだ。

無意識のうちに、あたしは自分のスカートをぎゅっと握りしめていた。

「学校じゃ話せない、休みの日もあんまり会ってくれない。その上何も話してくれないなんて。こんなの、付き合ってるなんて言えないよ……！」

あたしは二か月分の思いを全部吐き出した。

その時、コンコン、とドアが鳴って、開いたドアから三嶋のお母さんが顔を出した。

なんてタイミングの良さだろう。真剣に話していたはずのあたしと三嶋の意識は、完全にそっちに向いてしまった。

「英次、ちよつと買い物頼まれてくれない？ 紅茶入れようと思ったら、ちよつど切らしちゃって。いつもと同じのでいいから」

「わかったよ。木原さんも……」

「だめ。私と女同士の話をするのよ」

「……はい」

しびしび立ち上がって、三嶋はハンガーにかけてあったコートを取り、肩に引っ掛けながら部屋を出て行った。

話が中断されてしまって、なんか拍子抜けしてしまったあたしは、三嶋の後姿を半ば呆然としながら黙って見送っていた。

「ここ、座っても？」

不意に問いかけられ、三嶋の出て行ったドアから目線を戻すと、三嶋のお母さんはさっきまで三嶋が座ってたソファのところに立っていた。

「あ、はい、どうぞ」

慌てて促すあたしににこりとして、三嶋のお母さんはソファに

座った。

「あのね、最近英次の様子がちょっと違っててね」

「え……？」

唐突に切り出された話に、あたしは三嶋のお母さんが言おうとしていることがわからなくて、瞬きを繰り返しながら三嶋のお母さんを見た。三嶋のお母さんは優しそうな微笑みを浮かべていた。

その微笑を見て、やっぱり親子なんだ、って思った。笑ったときの目元が、三嶋に少し似てる。

「英次、最近アニメ見なくなったのよ。女の子のゲームみたいなのも全部捨てて……普通にになりたいって言うの」

「三嶋……じゃなかった、三嶋君が、ですか？」

「そうよ。ふふ、あなた見てすぐわかつちやった。あなたのために、あの子なりにかっこつけたかったのね。全然かっこついてないけど」

「あたしの、ために……？」

呟くようなあたしの問いかけに、三嶋のお母さんはにこりとして頷いた。

そんな話聞いちゃったらもう、あたしの胸に三嶋への想いが込み上げてくるのは言うまでもない話で。あたしは我慢できず、勢いよく立ち上がった。

「あの、すみません、ちょっと三嶋のところに行って来てもいいですか！？」

「ふふ、どうぞ。もう買い物も終わっただろうし、お店は駅の近くだから。駅の方に行けば会えると思うわ」

「ありがとうございます！」



あたしはそう言ってすぐ、相変わらず優しくそんな微笑みを浮かべている三嶋のお母さんに一礼して、飛び出すように三嶋の部屋を出た。それにしてもやっぱり三嶋のお母さんはすごい。あたしの気持ち、全部お見通しだったみたい。

三嶋に今会いたい。今すぐに。あたしはその一心で三嶋のもとへ走った。

## 第六話

三嶋の家を飛び出してしばらく走った後。

小さなベンチが一個だけある公園みたいなのに、ちらっとあいつが見えた。

そう、あたしは後姿をちょっと見ただけでもすぐ、三嶋だったわ  
かっちゃんだ。

「三嶋！」

あたしは大きな声で名前を呼びながら三嶋のどこに向かって全速  
力で走った。

そのままの勢いで振り向きかけた三嶋の背中に勢いよく抱きつく。

「わあ！」

あたしのあまりの勢いに押し倒されそうになった三嶋が、驚いて  
そんな情けない声を上げた。

けどそんなのは構ってられない。あたしは三嶋の背中に頬を押し  
付けるように顔を寄せて、力いっぱい抱きしめた。

「ごめん三嶋、好きだよ。大好き！」

「あ、あの……」

抱きついたらままだキドキしてたら、背中から困惑したような気配。  
ふと顔をあげてみると、そこには予想してなかった人がいた。

あたしをきよんとした顔で見ている子　三嶋と噂になってた  
女の子。

あたしは驚いてその子と三嶋を交互に見た。

「あの、さつき偶然会ったんです」

三嶋があたしの問いかけるような視線にそう答えたけど、言い訳みたいにしか聞こえない。

あたしが何も言えずに、ただぎゅっと手を握り締めて立ち尽くしていると、その子が三嶋とあたしの方に近寄ってきた。

「三嶋先輩？ お知り合いですか？」

女の子ははにかんだような可愛い笑顔で、言いながら三嶋の腕に自然に触れた。あくまでも自然で、別に深い意味はない行動だったんだろうけど……。なんかそれがすごく嫌で、その子が言ったことも、なんかあたしが部外者って言われてるような気がして。

すごく悔しくて、あたしは俯いて手をぎゅっと握り締めた。泣きそうになったけど、ぐっと我慢した。

だって負けられないんだ、あたし。

三嶋があたしのこと、本当に好きかどうかなんてもうわかんないでも、三嶋のこと好きな気持ちは誰にも負けない自信あるから。

こんなに好きになれて、すごく幸せだから。もっともっと一緒にいたいから。あたしには三嶋じゃなきゃいけないから。あたしが三嶋を幸せにしてあげるんだから。

だから、絶対に誰にも渡せないの。

「木原さん？ どこか、具合でも……」

俯いて黙ってしまったあたしを不思議に思ったのか、三嶋がその声を掛けてきた。

けど、あたしにはそれに答える余裕なんかなくて。

負けない。そう決意したと同時にぱつと顔を上げると、あたしは三嶋の襟首を両手で乱暴に掴んで強引に引き寄せた。

女の子と三嶋が呆気に取られてるのにも構わずに、あたしは三嶋に思いっきりキスをした。

## 第七話

勢い、だったかもしれないけど、やっぱり三嶋とのキスは胸が苦しくなるくらいに、心臓がうるさかった。それでも三嶋から顔を離れたあたしは、まるでトマトみたいに真っ赤になって茫然としている三嶋の襟首をつかんだままうつむいた。

「あたし……」

手が震えてくる。三嶋と女の子の視線を感じながら、あたしは咳いた。

「……あたし、三嶋の横にいるの、似合わないかも知れないけど……、一緒にいても彼女って、気づいてもらえないかもしれないけど……っ、」

言いながら、途中で涙がこみ上げてきて、涙声になった。

「負けないの、誰にも。好きだって気持ちだけは……。絶対、あたしといてよかったって、思わせるように頑張るから。だから、一緒にいてほしいの」

「き、木原さん……」

三嶋の困ったような声を頭の上に聞きながら、あたしは鼻を擽り上げた。

しばしの沈黙が流れた後、女の子が遠慮がちに口を開いた。

「……なんか……、すごいな。三嶋先輩、幸せですね」

女の子はそう言っつて、でも三嶋じゃなくあたしに微笑みかけてきた。意味がわからなくて、あたしは三嶋の服をつかむのをやめて、涙目のまま女の子に向きなおった。女の子はそんなあたしに対して穏やかな笑みを崩さない。

「三嶋先輩の、彼女さんですよ。先輩から話聞いてて、すごく素適な人なんだろうなって思っつてたんです」

「え……？ 聞いて、つて？」

ちらりと三嶋を見てみたけど、真つ赤な顔した三嶋はまともに話せる状態じゃなさそうだ。

再び女の子に視線を戻したら、女の子は変わらず穏やかに微笑んでいた。

「私も、これからあのの人に、ちゃんと自分の気持ち話して来ようと思います。先輩達みたいになれるように」

そう言っつてまた、はにかんだようなかわいい笑顔を見せると、女の子は公園から出て行つた。

あたしは訳がわかんなくて、何も言えずにただ黙つて見送つていた。

「……あの子が、ボクの友達の佐々木のこと好きつてことだつたんで、相談に乗つてたんです。さつきは偶然そこで会つて。佐々木の家、この近くだから……」

茫然としているあたしに、だいぶ顔の赤さが薄れたけどまだ赤い三嶋がそう言つた。突然パソコン部の佐々木君の話が出てきて、あたしはただ目を瞬かせるしかできなかった。

「えっ？」

「絶対誰にも言うなって言われてたので……、黙ってて、すいませんでした」

「……。じゃあ、あたしが一人で勝手に勘違いしてたってこと……？」

「いえ、そんなことは……」

馬鹿みたいに嫉妬してた自分が情けなくて、あたしはその場に座り込んだ。三嶋が慌てて一緒にしゃがんだ。

「ごめんね、三嶋」

「えっ？」

「疑ってばっかだった。信じてあげられなくて、ごめんね……」

言いながら、また涙が込み上げてきた。自己嫌悪の涙。ほんと、どうしてこう泣き虫なんだろう。三嶋が戸惑いがちに、あたしの頭を撫でてくれた。

「泣かないで下さい。ボクも悪いし、その……、木原さんが泣くと、どうしていいかわからなくて……」

「でも……」

そんな簡単に割り切れない。好きな人のこと、信じてあげられなかったなんて。納得しようとしないうちに、三嶋は少しだけ目を細めて、それが心なしか小さく笑っているように見えた。

「話の、途中でしたよね」

「話……？」

突然切り出されて、何のことかわからないあたしはそう聞き返し

た。三嶋はあたしの頭に置いていた手を引つ込めながら、続ける。

「恥ずかしかつてばかりっていうのは、その、意識してしまってたんです。言い訳かもしれないけど、まだ付き合うつとか、慣れなくて……。敬語も、今更変えるのも違和感がある気がして……」  
「ああ……。うん」

三嶋がさっきの三嶋の家でしてた話の続きをしてくれてることがわかって、あたしは頷いた。

「でも、違うんです。好きなのは木原さんだけってことは、絶対な  
いって。それだけはちゃんと言わなきゃいけないって思ってた」  
「三嶋……」

三嶋は照れているのか少し赤くなりつつも、真剣な目をしていた。あたしってやっぱり単純なのかもしれない。三嶋の言葉一つで、さつきまで泣きべそかいてたあたしの顔に、笑みがこぼれる。

「ねえ、……。それってどういうこと？」  
「そ、それは……」

しどろもどろになる三嶋を見ながら、あたしは少し笑ってしまっ  
た。

「わかってるよ。ごめんね、ちょっと意地悪した」

あたしはそう言って立ち上がると、伸びをした。三嶋も一緒に立  
ち上がる。

「……あたしさあ、愛を感じなかったんだ」



「愛……、ですか？」

「そうだよ。それって女の子にとってはすごく重要なことなんだよ」「  
いまいちしっくりこない様子の三嶋に、あたしはまた笑いかける。

「でも、三嶋はやっぱり三嶋だね。不器用なところ……そんなところも全部好きになったんだもん。ごめんね、なんか見えなくなってきたみたい」

「いえ……、ボクも、もつと変わっていけたらと思います。もう木原さんが泣かなくてすむように」

また、思わず微笑んでしまった。ちょっと前の三嶋なら絶対こんなこと言わなかった。きつとあたしの気持ち、少しずつだけど三嶋に伝わってるってことだよな。

こんなのが幸せっていうんだろうな。やっぱり、三嶋と付き合い合えてよかった。

## 最終話

次の日、日曜日。あたしは三嶋とデートしている。埋め合わせに  
って三嶋から誘ってくれたのは、女の子のおかげ。

「へえ、上手くいったんだ。よかったね」

「はい。木原さんにお礼を言っとうてくださって、あの子が」

結局、昨日告白しに行った女の子とパソコン部の佐々木君はうまく  
いったらしい。

あんなに振り回されたんだもん、どうせだから、上手くいったよ  
かった。

昨日も来た小さな公園のベンチに、あたしと三嶋は肩を並べて座  
ってる。

いつになってもやっぱり、三嶋が当たり前にそばにいることは、  
新鮮で嬉しい。二日連続で三嶋に会えたんだから、振り回されたけ  
ど、あの子には感謝もしなきゃね。

冬の空気は冷たいけど、三嶋のそばにいとそれすら心地いい  
気がした。

でも寒いのはやっぱり寒い。身震いした拍子に、ひとつ、くしゃ  
みが出た。

やばい、鼻の頭が赤くなってるかも、なんて考えてたそのとき。  
ふわり、と体が温かい三嶋の匂いに包まれた。

見ると、あたしの肩に、さっきまで三嶋が着てたコートがかかっ  
ていて。

状況がよく飲み込めなくて、あたしは二、三度瞬きを繰り返す。

そうしてやっと三嶋が寒がってるあたしに自分のコート貸してくれたんだって理解して、あたしは思わず笑ってしまった。三嶋がそんなあたしを見て少し赤くなっている。

「ど、どうして笑うんですか。そりゃあ、らしくないかもしれないけど……」

「あはは、違うの。まさかこんなことしてくれるなんて思わなくていい」

本当に意外だった。だってあの三嶋が、自分のコートかけてくれるなんて、まるで王道なことするんだもん。純粹で、恋愛慣れしてなくて、カッコいいことが全然似合わなくて、女心のわかってない三嶋が。

嬉しいのも手伝って、笑いは一向に止まらない。三嶋には悪いけど、笑いすぎて涙まで出てきた。普通の恋人同士なら普通に感動する場面なんだろうけど、そこはやっぱりあたしと三嶋。ムードも何もあつたもんじゃない。

「……ボクだって、精一杯なんです。必死になって、みつともないかもしれないけど」

笑うあたしにちょっと気を悪くしたのか、三嶋がどこか拗ねたようにぼつりとこぼした。

らしくもなく、あたしにコートかけたりするのも。オタクのくせにアニメ見るのやめたりするのも、一生懸命に想ってるから。

あたしだけじゃないんだ。三嶋もおんなじ。

そう思ったら嬉しくて、愛しくて。やっと笑いの引っ込んだあた

しは、思わず隣に座ってる三嶋の肩に、寄りかかるようにして頭をあずけた。頭の斜め上から息をのむ気配。緊張したのか、三嶋の肩が硬直した。

やっぱりどうしようもなく、愛しい。

みつともなくなんかない。だってそれは、三嶋もあたしのこと想ってくれてる証拠だから。

「……今度はさ、もっとロマンチックなキスがしたいね」  
「えっ!?!」

肩越しに三嶋の顔を覗き込んで唐突に言ったら、三嶋は面白いほど急激に耳まで赤くなって、裏返った声を上げた。三嶋の顔がこっち向いて、お互いの視線が至近距離でぶつかる。あたしがどきりとするのと同時に、慌てて顔をそらす三嶋。

よかった。あたしも顔が赤くなっちゃったこと、ばれなかったから。  
ら。

どんな時も、主導権はあたしのもの。あたしの特権なんだから。やっぱりからかうのはあたしでなきゃ、ね。

「なによ。なにをそんなに動揺してんの？ 顔真っ赤だよ」

なんて、自分のことは棚に上げて言ってみる。三嶋はいつぱいいっぱいなのか、あたしの顔の赤さには全然気づいてない。

「その……、不意打ちは、やめてほしかったというか……」  
「じゃあ不意打ちじゃなかったらいいんだ？ 今からもう一回、する?」

「!」

「うそ。冗談だよ」

あたしがからかうように言ったら、三嶋は顔をそらしたまま、これ以上ないくらいに赤くなって言葉に詰まってしまった。そんな三嶋がなんか無性に可愛かった。

「ねえ、あたしたちってさ、すごくお似合いだね」

そう言って笑いかけたら、三嶋もやっところちを向いて笑ってくれた。

困ったような笑い方は、三嶋のくせなのかもしれないけど。

それは初めて会った雨の日の笑顔よりも、両想いになったカサの中での笑顔よりも、ずっと素敵な笑顔。

なんとなく、忘れられない思い出になりそうな気がした。

『好きなんですよ。くあいつの気持ちく』 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7994c/>

---

好きなんでしょ？～あいつの気持ち～

2010年10月10日21時51分発行